副葬品配列からみた武器の価値
―軍事組織復元の可能性―

藤原　　哲

総合研究大学院大学　文化科学研究科　日本歴史研究専攻

本論の目的は古墳時代における軍事組織の可能性を探ることである。これを検討するための考古学的な資料としては古墳時代の武器や武具が挙げられる。しかしながら古墳時代の武器は大部分が墳墓から出土しており、直接的には戦闘や軍事組織を反映していない可能性が高い。

そのため、武器という資料を検討する一手段として遺物の出土状況、すなわち古墳における武器の配置状態を検討し、墳墓としての古墳で武器や武具がどのように取り扱われてきたのかを探る。そのことで当時の武器の価値的な側面を明らかにする。その結果から古墳へ埋納された武器がどの程度、実際の武装（実用性）や組織を具現していた可能性があるのかを考えてみた。

古墳時代前期～後期の未盗掘の竪穴系墳墓を中心に武器の副葬状況を検討した結果、近畿を中心とする大・中規模の古墳においては、「遺骸の外部との遮断」から「武器の同種多量埋納」、「記号的属性を帯びた副葬」へという変化過程を経ることを明らかにした。一方、中・小型の古墳では、前期において少数の武器を人体付近に副葬する事例が多く、中期にいたると防御用道具（甲冑）、接近戦用道具（刀剣）、遠距離戦用道具（弓矢）など、それぞれ用途の異なる武器を少数ずつ人体周辺に副葬する特長が抽出できた。

武器の価値的な背景を検討し、武器副葬の意義を考察した結果、大・中の首長たちの副葬行為は武器を大量に副葬するという象徴的な、又は記号的な意味合いが強いと考えた。対照的に、中・小首長たちは、人体付近に武器を副葬しており、それら武器は実際に使用していた、又は生前の身分を表すような価値的な背景を推察した。その結果から、古墳時代の副葬武器から実際の戦闘や軍事組織が復元できる可能性を指摘した

キーワード：武器、副葬品配列、価値、古墳時代

はじめに
1. 研究史と研究の方法
2. 古墳主体部における武器配置の分類
3. 具体事例
4. 武器副葬の時代的特徴と変遷
5. 古墳へ副葬された武器の価値
6. 副葬品における実用性と軍事組織復元の可能性
まとめ

はじめに

古墳から出土する武器を用いて過去の戦闘や軍事組織を復元することはできるのであろうか？　この問いに答えるために、本論では副葬武器に関する価値的な問題を考察する。そのための方法として古墳主体部における武器の配置状態を検討し、古墳において武器や武具が取り扱われてきた社会的背景を探る。その結果から古墳へ埋納された武器がどの程度、実際的な武装や組織を具現していた可能性があるのかを考えてみたい。なお、以下では武器と武具の両者を指して武器と総称していることを付言しておく。

1. 研究史と研究の方法

古墳時代の戦闘や軍事組織を検討する考古資料としては刀剣や甲冑などが挙げられる。武器とは本義的には対人殺傷のための利器であり、集団間の戦闘ではそれぞれがストックしている武器を用いて争われるために他ならないからである。事実、これまでの考古学研究において、墳墓出土の武器から当時の戦闘や軍事組織を検討する試みは早くから行われてきた。

小林行雄や小野山節は馬具の普及や挂甲の出現を歩兵戦から騎馬戦への移行と位置づけ、朝鮮半島における戦闘の影響を想定した（小林 1959; 小野山 1959）。一方、原田大六や近藤義郎・今井堯は群集墳における副葬品の階層差から当時の軍事組織を推察している（原田 1962; 近藤・今井 1971）。やや単純化すれば、馬具を副葬している群集墳の被葬者は「乗馬して戦う下級指揮者」であり、刀剣や鏃だけが副葬された被葬者は「歩兵」である、という論法である。これら初期の研究においては、古墳出土遺物をアプリオリに実用品とみなし、かつ副葬された考古遺物が実際の社会組織を表しているという認識に立脚して研究がすすめられたといえるであろう。

1980年代末～90年にかけては藤田和尊、都出比呂志、松木武彦、滝沢誠などが次々と武器や軍事組織に関する論考を発表し、学会の耳目を集めた。各氏の用いる資料は異なっていたが、それぞれ武器の変革や武器副葬などに軍事組織の生成や発展過程を読み取ろうとしたのである（藤田 1988; 松木 1992; 滝沢 1994; 都出 2000）。

中でも最も具体的に軍事組織を検討したのが田中晋作である。田中は近畿の中期古墳における武器の大量出土に注目し「大塚古墳型」「野中古墳型」「西墓山古墳型」「西小山古墳型」を設定した。このうち大塚古墳型、西小山古墳型として出土する武器などは武人的性格をもつ古墳被葬者が所有したもの、野中古墳型、西墓山古墳型はある者か、ある組織から貸与されるために存在した武器の一部であるとした。そして古墳に埋納された大量の武器は当時の所有や保管・管理体制を反映しているとして百舌鳥・古市古墳群周辺の軍事組織を「常備軍」と評価し、戦時や平時の軍事組織のあり方を論じた（田中 1993）。

これら刺激的な論考が相次いだ結果、1990年代には軍事組織についての活発な論争が行われた。主に論陣を張ったのは松木・藤田・田中の三氏である（松木 1994、1995; 藤田 1995; 田中 1995）。議論そのものは並行線をたどった感もあるが、いくつかの根本的な問題点が指摘された

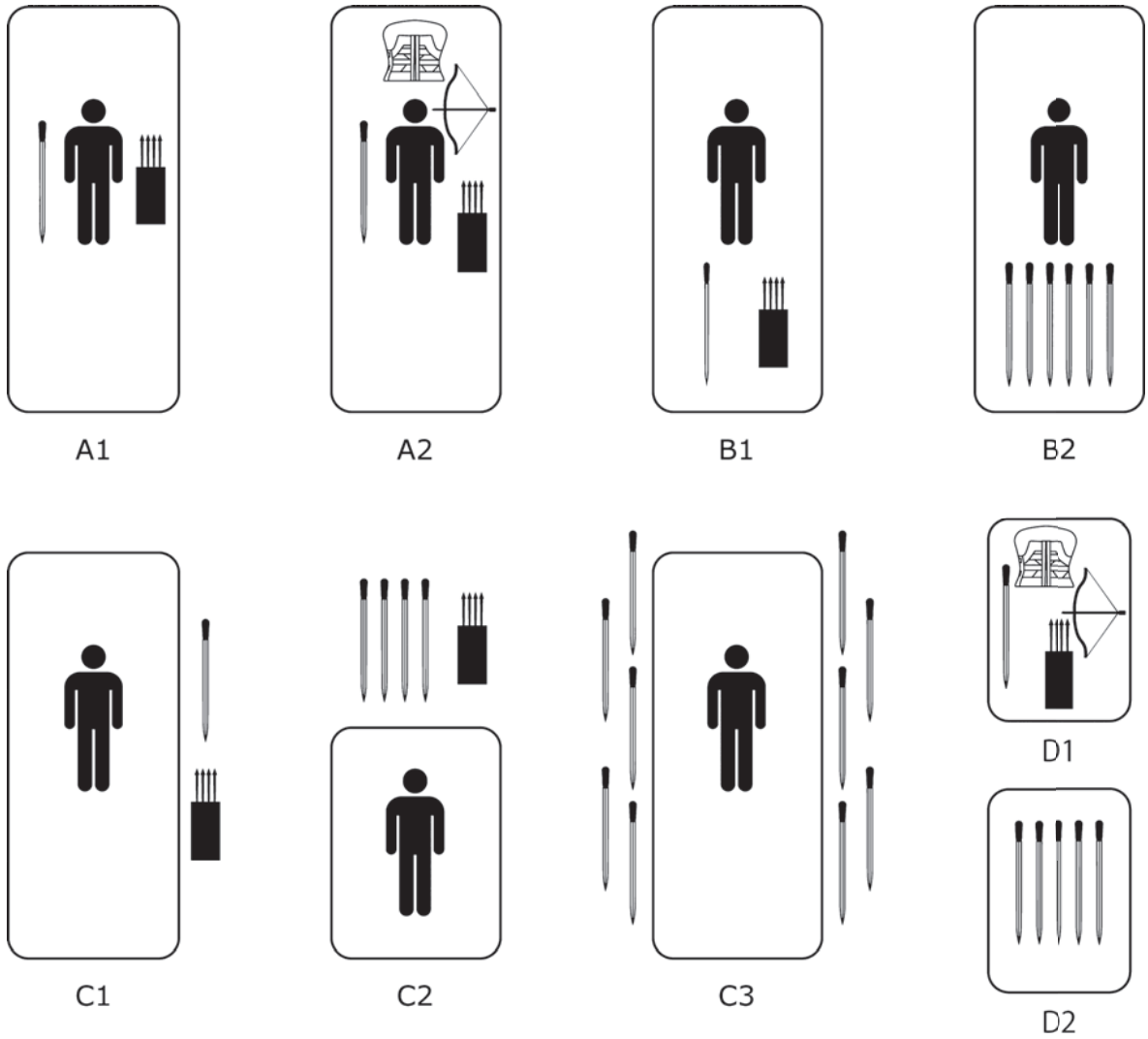


図１　武器配置の型式　模式図

ことは重要である。

すなわち遺構解釈の方法論に関して古墳出土遺物である武器や武具は葬送儀礼行為の痕跡を示すものであって、直接的に生前の武装内容や、個人（集団）の保有・保管状況を示さないのではないか、といった指摘である。同様の指摘は1993年に水野敏典も行っているが（水野 1993）、これまで古墳時代の戦闘や軍事組織を検討する多くの研究が、墳墓（古墳）出土の資料に立脚せざるを得なかった考古学にとって、研究そのものの根本的な見直しを迫る疑義であったといえる。

その結果、古墳時代の軍事組織を検討する研究はやや下火となる。藤田や松木、田中などがこれまでの研究を深化させたもの（藤田 2006; 松木 2007; 田中ほか 2010）を除いては、豊島直博が鉄製武器を中心とした手堅い実証研究を通じて新たな知見を増やしているのが注意を引く程度に過ぎない（豊島 1999、2010）。

こういった研究史を踏まえ、本論の設問は古墳から出土する武器を用いて過去の戦闘や軍事組織を復元することはできるのか？　と定めた。これを解明する手続きとしては最初に武器の出土状況を検討しておきたい。武器は対人殺傷用

の利器であるが「墓に置かれたものは、あくまでも墓に置かれたものとして解釈しなければならない」（松木 1994: 97）ためであり、考古資料の分析には遺物の出土状況の検討が不可欠だからである。

換言すれば、古墳から出土する武器の基本的な出土状況を検討し、古墳において武器が取り扱われてきた背景を探ることで当時の武器の価値的体系を検討する。その結果から過去の実際的な武装や保有形態を読み取ることが可能であるのか考えてみたい。

2. 古墳主体部における武器配置の分類

古墳の副葬遺物の出土状況（配列状況）は、それ自体が考古学の研究対象である。小林行雄が副葬品配列に棺内と棺外の区別を行って以来（小林 1976a）、用田政晴や今尾文昭が遺物の配列をより詳細に検討し（用田 1980; 今尾 1984）、近年では被葬者の身体部位までも視野に含めた研究が行われている（光本 2001）。また研究が細分化する過程では、鈴木一有や宇垣匡雅など武器の副葬や配列に特化した研究（鈴木 1996; 宇垣 1997）も試みられた。これら副葬品配列の検討は主として前期古墳を対象とするものが多く、前期から中期へ、更に中期から後期へといった変化の過程やプロセスが問題とされることが少なかったという点も指摘されている（岸本 2010）。

ここでは今尾文昭の研究を参照して、「副葬品の配置行為は、埋葬施設の構築作業にともなう各段階ごとに行われる」という見解に従う（今尾 1984: 113）。そして古墳の築造とそれぞれの段階で行われる儀礼行為との関係性から、副葬段階を次のように区分する。

墳丘構築

↓　墓擴の掘下、棺・槨の設置

↓　棺への被葬者の埋葬（A段階）

↓　棺の空白地への副葬（B段階）

↓　棺の蓋、粘土被覆や槨の構築など（C段階）

天井石の架構、墓擴の埋設など

それぞれの段階において実施された儀礼痕跡から把握される武器の出土状況は、棺内の人体周辺配列（A段階＝A型配置）、人体周辺以外の棺内配列（B段階＝B型配置）、棺外配列（C段階＝C型配置）とに大きく分けることができる。この他、武器に関しては人体を埋葬しない遺物専用の埋納が知られているので、これはD型として区別する。また、A～Dのそれぞれの型式については便宜上、次のように細分しておく。

A1型　武器（刀剣や鏃など）を棺内の人体周辺に副えるもの。

A2型　A型のうち、特に甲冑、刀剣、弓矢など異なる機能を持つ3種類以上の武器を少数ずつ人体周囲に配置するもの。

B1型　棺内の人体周辺以外の空白地に少量の武器を配置するもの。

B2型　棺内の空白地に武器を集積するもの。

C1型　棺外に少数の武器を副葬するもの。

C2型　棺外に武器を集積するもの。

C3型　棺外に武器を集積するもののうち、特に棺を囲むように配置するもの。

D1型　刀剣、甲冑、弓矢などを木箱などに収納するもの。

D2型　大量の武器を石室等に集積するもの。

3. 具体事例

前節において区分した出土状況を具体的な古墳に即して見ていきたい。研究の性格と紙面との都合から、対象とする古墳は出土状況が原位置を保つ未盗掘の竪穴系主体部の代表的なものとなることを断わっておく。古墳の時期に関しては前方後円墳集成の10期編年（以下、集成編年：広瀬 1991）を採用し、集成1～4期を前期、5～7期を中期、8～10期を後期とする。円墳や方墳などについては主要な出土遺物の型式から集成

編年の時期に換算し直した。墳形を省略する場合は前方後円墳･帆立貝式を●、前方後方墳を■、円墳を○、方墳を□としている。また、古墳規模は社会性や集団性を表すと考えるので墳長100m以上の古墳をａクラス、50～99mクラスの古墳をｂクラス、49m以下の墳墓をｃクラスとする。なお、個々の事例において引用や出典を行った報告書については、煩雑さをさけるため逐一注記を行わず、巻末に一括して記した。

前期（集成１～４期）・近畿地方

近畿地方におけるａクラス（100m以上）の古式古墳で配列状況が明らかなものとしては奈良県黒塚古墳（2期：●130m）が挙げられる。黒塚古墳の主体部は長8.3mの竪穴式石室（割竹形木棺）で、棺内の人体推定付近や南小口から少量の武器が出土しているが（Ａ1型＋Ｂ1型）、大部分の副葬品（鏡33、刀・剣又はヤリ25、鉄族170）は棺の周囲（棺外）に並べられていた（Ｃ3型）。大阪府紫金山古墳（2期：●100m）でも刀剣35、鉄鏃153が竪穴石室の壁四周の板石の上に配され、石室壁の上部外縁においても刀剣37が出土しているなど、主に棺を取り囲むように武器が配置されている（Ｃ3型）。滋賀県安土瓢箪山古墳（3期：●162m）、三重県石山古墳（4期：●120m）など近畿周辺のａクラスの前方後円墳においても、未盗掘の主体部における武器配置は棺を取り囲むようなＣ3型配置が主である。

前期の近畿地方ではbクラス古墳（50～99m）においてもＣ3型の武器配置が顕著な事例が多い。京都府園部垣内古墳（3期：●82m）では人体推定付近には玉類と鏡のみが置かれ、刀剣やヤリ、短甲といった武器はほぼ全て棺外（槨内）から棺を取り囲むようにして出土している（Ｃ3型）。また京都府寺戸大塚古墳（2期：95m●）、京都府長法寺南原古墳（3期：■62m）、京都府瓦谷1号墳（3期：●51m）もＣ3型の武器配置であり、大阪府庭鳥塚古墳（3期：■56m）のように木棺を囲んだ武器が弓矢（靫1、鉄鏃135、銅鏃56）中心という独特なＣ3型配置も存在している。一方、ｂクラス古墳の中には武器を集積した施設も知られており、奈良県新沢千塚500号墳（3期:●62m）の後円部副槨からは刀剣27、ヤリ・矛2、鏃27、短甲1などの武器が集中的に出土している（Ｄ2型）。

ｃクラスの古墳（49m以下）では奈良県鴨都波1号墳（3期：□20m）のように刀剣、靫、矢、短甲など主要な武器で棺の周囲を囲むもの（Ｃ3型）もあるが、京都府作り山1号墳（3期：○36m）では組合式石棺の副室に農工具と鉄剣12を納めている（Ｂ2型）。これより更に小規模な奈良県池ノ内古墳群（4期：○13～16m）、野山古墳群菖蒲谷支群3号墳（4期：区画墓）などでは数点の刀剣や鏃が主として棺内から出土している（Ａ1型）。

前期（集成１～４期）・東日本

東日本（前期）ａクラス（100m以上）の群馬県前橋天神山古墳（3期：●129m）は正式報告が未刊なものの、武器の大半は粘土槨と木棺内の両端から出土している状況である（Ｃ3型＋Ｂ1型？）。静岡県松林山古墳（3期：●116m）の竪穴式石室では中央部（人体想定位置）に武器はなく､それ以外の棺内に密集した刀剣や靫（と鏃）が置かれ（Ｂ2型）、石室の壁面に沿って矛も出土している（Ｃ1型）。福島県会津大塚山古墳（3期：●114m）では南棺の推定頭位付近に鏃、人体付近に刀があり（Ａ1型）、それ以外の棺内において刀剣や鏃が配置されている（Ｂ1型）。

ｂクラス古墳（50～99m）の武器配置は概ね棺内中心で、武器数も比較的少ないが、それぞれの配置方法はややまとまりを欠く感じである。栃木県山王寺大枡塚古墳（4期：■96m）は棺内の人体推定地付近に刀剣や靫、鏃などが出土し（Ａ1型）、神奈川県加瀬白山古墳（4期：●87m）の後円部木炭槨では人体推定位置を取り囲むように刀剣が出土し棺の西端で鉄鏃が数点出土している（Ａ1＋Ｂ1型）。福島県大安場1号墳（4期:

■83m）も棺内から刀1、剣1、ヤリ1が出土し（A1型）、栃木県駒形大塚古墳（2期：■64m）、長野県弘法山古墳（1期：■63m）、静岡県赤門上古墳（3期：●57m）、千葉県新皇塚古墳（4期：■60m）、千葉県神門3号墳（1期：●57m）においても棺内から武器が出土している。

ｃクラス古墳（49m以下）では岐阜県龍門寺1号墳（3期：○17m）において短甲1、刀2、鉄鏃49は棺外から検出されている（C3型）。しかし東日本ｃクラス古墳の大部分は棺内配置（A・B型）であり静岡県新豊院山2号墳（1期：●34m）、群馬県朝倉2号墳（4期：○23m）、群馬県成瀬向山1号墳（3期：□20m）などで少量の武器が棺内に副葬されている。その中にあって茨城県岩瀬狐塚古墳（3期：■44m）では粘土槨内の人体推定地点の周辺から刀剣2、銅鏃4、短甲1といった武器・武具類が出土している（A2型）。

前期（集成１～４期）・西日本

西日本におけるａ・ｂクラス（50m以上）の前期古墳では近畿地方と同じくC型配置が多いが、それ以外の配置状況も存在する。福岡県一貴山銚子塚古墳（4期：●103m）では後円部の主体部においては鏡と刀剣が石室に沿って取り囲むように並べてあり、石室壁の上面でも石室を取り囲むように刀剣や鉄鏃が入念に配置されている（C3型）。これに対し日本海側の鳥取県馬山4号墳（3期：●100m）では7つの主体部のうち武器が出土しているのは竪穴石室と第一箱式棺のみでいずれも棺外に若干の武器が配置されている（C1型）。

ｂクラス古墳でも熊本県向野田古墳（4期：●86m）、大分県免ヶ平古墳（2期：●69m）では刀剣などによって棺を取り囲んだ配置であり、これに対し宮崎県西都原72号墳（3期：●70m）の前方部主体部からは剣と鏃が（A1型か）、後円部の粘土槨・木棺内には刀剣4がやや密集して置かれている（B1型か）。

ｃクラス古墳（49m以下）では様々な武器配置がみられ、岡山県新庄天神山古墳（2期：○40m）や福岡県若八幡宮古墳（3期：●48m）では武器が棺外を取り囲んでいるが（C3型）、島根県奥才14号墳（3期：○18m）第1主体では武器が箱式石棺に接した白色粘土に被覆され（C1型）、岡山県用木1号墳（3期：○31m）では刀剣4（A1型）と銅鏃37が棺内に密集して出土し（B2型）、兵庫県養久山1号墳（1期：●32m）第1主体（竪穴式石室）の副葬武器は剣2（A1型）、山口県国森古墳（2期：□30m）では木棺内に剣1、ヤリ1、鉄鏃39、棺外に鉾1が認められた（A1＋C1型）。

この他では高塚墳ではないものの、南九州地方の弥生末～古墳時代にかけて土擴墓に鉄剣や鉄鏃を数点ほど副葬する遺跡（宮崎県川床遺跡、鹿児島県成川遺跡）があり特筆される。

中期（集成５～７期）・近畿地方

中期の近畿地方におけるａクラス古墳（100m以上）で内部主体が明らかな事例は少ない。京都府久津川車塚古墳（5期：●180m）は明治27年に発掘された際の見取図と大正4年に梅原末治が調査した際の図面に若干の相違点があるが、棺内に鏡や玉類などの装飾品が多く、棺外には武器・武具、石製模造品が配置されていた状況は共通している（C2型か）。大阪府百舌鳥（堺）大塚山古墳（5期:●168m）は戦後の開発（破壊）によって跡形も無く消滅したが、前方部に4つ、後円部に4つの粘土槨が存在したことが知られている。1号槨と7号槨が人体埋納で、残りの主体部6基は遺物専用の埋納施設であったと考えられ、例えば4号槨の遺物のみで刀剣2群200、矛1、鉄鏃6群、手斧16、鋸、斧、鎌、鉗という膨大な量であった（D2型）。京都府恵解山古墳（5期：●124m）でも、後円部の石室は未調査であるが、前方部より大量の武器を埋納した遺物専用施設が検出され（D2型）、大阪府黒姫山古墳（7期：●144m）でも前方部石室内から短甲24、衝角付冑11、眉庇付冑13、甲冑付属品、刀剣24、鉾9、

鏃56などの大量の武器・武具類が納められていた（D2型）。大型古墳の陪塚的な存在で墳長そのものはb・cクラスとなるが、大阪府七観古墳（6期：○50m）、大阪府アリ山古墳（6期：□45m）、大阪府野中古墳（7期：□28m）、大阪府西墓山古墳（6期：□20m）でも遺物専用埋納施設（D2型）と考えられる遺構が報告されている。

中期のbクラス古墳（50～99m）では大阪府盾塚古墳（5期：●64）、大阪府大塚古墳（5期○56m）、大阪府御獅子塚古墳（6期：●55m）などにおいて棺内外の各段階（A・B・C型）から大量の武器が出土している。大阪府東車塚古墳（5期：■65m）、兵庫県水堂古墳（5期：●60m）、大阪府風吹山古墳（5期：○56m）などでは棺内に武器が置かれ（A1型、B1型）、大阪府唐櫃山古墳（7期：●53m）、和歌山県大谷古墳（8期：●70m）では主体部そのものは盗掘を受けていたが、棺外の石室内に甲冑類を主とする武具類などが配置されていた（C2型）。

近畿地方ではcクラス古墳（49m以下）においても大阪府鞍塚古墳（6期：○39m）、大阪府珠金塚古墳（6期：□27m）などにおいて棺内外における各段階（A・B・C型）から武器が大量に出土している。奈良県塚山古墳（7期：□24m）では人骨の左右両側に剣2、刀子1があり（A1型）、組合式石棺に付属する副室には甲冑1組、鉄鏃、鉄製工具などが密集して置かれ（B2型）、棺外からも刀剣やヤリが認められている（C3型）。滋賀県新開1号墳（6期：○36m）、大阪府西小山古墳（6期：○40m）では棺内より武器が出土しているが（A・B型）、特に、奈良県野山古墳群などの墳丘規模が10m～20m程度の小型古墳においては大部分が刀剣や鏃など少量の武器が棺内から出土している。京都府上人ヶ平18号墳（7期：□8m）、大阪府亀井古墳2号主体部（7期：□7m）、滋賀県宇佐山13号墳（5期：箱式石棺）、大阪府土師の里遺跡（5～7期：埴輪棺）など、その他の低墳丘墓や土器棺、土壙墓においても武器が出土する場合は棺内外から少量の武器が出土する程度である。

中期（集成5～7期）・東日本

東日本におけるa・bクラス（50m以上）においては棺内へ武器が配置される事例が多い。東京都野毛大塚古墳（5期：○82m）の第一主体部（粘土槨・割竹形木棺）では人体推定地の両脇に刀剣を配し（A1型）、頭位側の北東端には刀剣、足元側には甲冑と刀剣、ヤリ、鉄鏃が密集して置かれていた（B2）。群馬県赤掘茶臼山古墳（6期：●59m）の木炭槨第1号では人体推定位置の両脇に刀剣が、棺の東（頭位）側に刀剣、鉄鏃、短甲を配置する（B1型）。石川県和田山5号墳（7期：●56m）は後円部に2基の粘土槨があり、A槨の棺内では人体推定位置の両脇部分に刀剣（A2）、頭部付近に鏡と甲冑1組、足下から鏃や農工具が出土しており（B1型）、B槨棺内西側には短甲と刀剣が密集して置かれていた（B2型）。千葉県八重原1号墳（7期：○55m）、福井県天神山7号墳（6期：○52m）でも棺内に武器が配置されている（A、B型）。

cクラス古墳（49m以下）においても主に棺内へ武器を配置しているが、特に人体の周囲に甲冑、刀剣、鉄鏃など様々な用途の武器を少数ずつを配置したA2型の武器配列が非常に多い。栃木県佐野八幡山古墳（5期：○46m）の竪穴式石室では人骨両脇の位置より刀が出土、歯牙側（頭位側）である石室北東端に短甲と衝角付冑が、反対の南西（足元側）には鉄鏃が置かれていた（A2型）。静岡県安久路2号墳（5期：○26m）、安久路3号墳（5期:○27m）、富山県谷地12号墳（5期:○30m）、石川県茶臼山9号墳第2主体部（5期：○16m）、神奈川県朝光寺原1号墳（7期：○37m）、三重県小谷13号墳（7期：○20m）第1主体部、千葉県花野井大塚古墳（7期：20m）なども同様のA2型配置で人体（推定地点）周辺から刀剣、鉄鏃、甲冑といった複数種類の武器が出土している。甲冑を伴わないものの、棺内から刀剣や鏃などの武器が出土しているものでは栃

木県桑57号墳（7期：○32m）、福井県龍ヶ岡古墳（5期:○30m)、愛知県松ヶ洞8号墳2号棺（7期:○16m)、などが挙げられる（A1型)。

棺の内外から武器が出土している事例も存在する。埼玉県東耕地3号墳（7期：○25m）の副葬品としては棺内より短甲1、刀1、剣1をコの字状に配し（A1型)、棺外からは矛1、鉄鏃10が出土している。(C3型)。三重県八重田16号墳(7期:□16m）は木棺直葬で棺内から刀2、ヤリ2、鉄鏃36が出土し（A1型)、主体部から50㎝東に離れた棺外から短甲1が出土している（C3型)。静岡県千人塚古墳（7期：○49m）の第2主体部では中央部の空白地（人体推定位置）を刀剣と甲冑が囲み（A1型)、棺外から鉄鏃や剣が出土している（C3型)。また、近畿周辺に位置する三重県わき塚1号墳（5期：□23m）では土坑内（木箱）に武器をはじめとした遺物埋納施設が報告されている（D1型)。

高塚古墳以外の土擴墓から武器が出土する事例もあり、長野県八幡原遺跡土擴墓1（7期、木棺墓か）は推定人体位置の左側に鉄製農工具のほか鉄鏃7が（A1型)、土擴墓2（7期、木棺墓か）からは臼玉、U字鍬、鉄斧、ヤリガンナと共に直刀1が出土している（A1型)。

中期（集成５～７期）・西日本

西日本におけるａ・ｂクラス（50m以上）の古墳のうち兵庫県雲部車塚古墳（6期：●140m）は明治年間に発掘されたが、比較的正確な記録が残っている。それを参照すると竪穴式石室内に長持形石棺があり、石室内に甲冑を始めとする武器を置き、壁面には刀剣が掛けられていたとされる。壁に刀剣を掛けるのは類例がなく特異な棺外配置（C型）である。兵庫県茶すり山古墳（5期：○91m）の第1主体部は木棺で棺内が4つに区画され、人体が推定される中央区画には刀剣がコの字に囲まれ、更にその上に革盾をかぶせていた痕跡が残っていた（A1型)。岡山県月の輪古墳（5期：○60m）は3つの粘土槨があり、中央主体は人体推定位置の両脇に刀剣が配置され（A1型)、その足元より西側には刀剣や鏃、工具類が密集しており（B2型)、頭位の東方には短甲が置かれていた。棺外からはヤリも出土している（C1型)。

当該期の東日本と同じく、西日本でも棺内の人体周辺から3種類以上の武器が少数ずつ出土した事例があり、ｂクラスの京都府私市丸山古墳（6期：○71m）第1主体部では剣2、胡籙1、鉄鏃38、甲冑1組の武器が出土（A2型)、京都府産土山古墳（6期：○50m）でも棺内に甲冑や鏃が配置されているが、副葬された武器は個人が使用できる程度の少量ずつである（A2＋C1型)。

ｃクラスの古墳（49m以下）においても人体周辺に異なる機能をもつ3種類以上の武器が少数ずつ配置した副葬（A2型）が多数見られる。福岡県井出ノ上古墳（5期：○26m）の第2主体部は箱式石棺で熟年男性の人骨が良好に残り、左肩から肘付近に刀1、剣1、矛1、鉄鏃9、左側足元に刀1、右肩から肘にかけて剣1、鉄鏃16、下腿部分に短甲1が副葬されていた（A2型)。この他にも岡山県勝負砂古墳（7期：●42m)、兵庫県小野大塚古墳（6期：○45m)、福岡県花聳1号墳（6期：○)、福岡県稲童21号墳（7期：○22m)、福岡県琵琶隈古墳（6期：○25m）広島県亀山古墳（7期○40m)、岡山県正崎2号墳（7期：○20m)、香川県大井七つ塚4号墳（7期：○20m)、兵庫県奥山大塚古墳（7期：○15m)、宮崎県六野原6号墳（7期：○12m)、香川県川上古墳（7期：○22m)、兵庫県法花堂2号墳（7期：墳丘不明）などの主体部においても同様なA2型の武器配列が確認できる。

棺内外から武器が出土する事例としては広島県城ノ下1号墳（7期：○21m)、愛媛県猪の窪1号墳（5期：○18m）などが存在するが、兵庫県沖田11号墳（6期：□18m）第2主体では1墓擴に2つの箱式石棺が設けられており、南棺内の身体部分両脇には刀剣、左側には鉄鏃が配置され（A1型)、更に石棺外では解かれた（解体した状

態で）短甲が出土する（C3型）という珍しい出土状況である。

高塚古墳以外の事例として宮崎県六野原地下式10号墓（7期：地下式横穴墓）や宮崎県島内地下式横穴墓（7～8期：地下式横穴）などで多数の武器が出土している。

後期（集成８～10期）・近畿地方

後期古墳は墳丘規模が小さく横穴式石室が多いことから、未盗掘で武器の配列状況が明らかな具体例は極端に少なくなる。未盗掘古墳のうち奈良県藤ノ木古墳（10期：○48m）は両袖式の横穴式石室にある家形石棺棺内の2体の被葬者周辺には玉、耳飾、飾金具、鏡、金銅製冠、金銅製履などの装身具が副葬され、武器としては大刀5、短剣1がそれぞれ被葬者の脇から出土している（A1型）。棺外石室内からは挂甲、鉄鏃、馬具などが出土しているが後世の撹乱を受けていて整然としていない。滋賀県鴨稲荷山古墳（9期：●60m）の主体部も横穴式石室で、玄室には家形石棺が安置されていた。石棺内は明治35年に発掘され、大正12年に再調査されている。棺内には装飾品と武器、棺外には土器と馬具があったとされ、発掘当時の見取図によれば棺の内部両側に沿って（人体の両脇に）大刀が各1あり（A1型）、棺南側に冠、北側に沓が見られた。また中央部には柄頭を東方にした剣が斜めに横たえられ、あたかも身体に佩いたかの様な位置にあったという。大阪府富木車塚古墳（9期：●48m）では6つの主体部が検出され、それぞれから刀、鏃数数点が出土している（A1型）。

上記以下のクラスでは滋賀県雲雀山2号墳（8期：○16m）の棺内中央（人体推定位置）両脇には刀剣が置かれており（A1型）、鉄鏃、短甲は棺外配置（C3型）、石室の石塊上からは矛が出土している。大阪府土保山（8期：○27m）1号棺（竪穴式石室内・組合式木棺）からは頭位が推定される棺内北寄りに鏡と玉類、櫛があり、足元に刀剣の杷と短甲が置かれ（A1型）、木棺の蓋上からは盾、矛、ヤリガンナが、石室内の棺外北に短甲、南に馬具と櫛、西には矢が配列されていた（C3型）。また石室に接して粘土槨があり、この箱式木棺は遺物埋納専用施設で、中からは矢を入れた靫4、冑、草摺、肩鎧各2組を置いた上に弓6が並べて置かれていた（D2型）。

横穴式石室導入前の初期群集墳における武器の配列状況としては滋賀県黒田長山古墳群、奈良県後出古墳群などがあり、10～20m程度の円墳からA1型やA2型など様々な武器配置が見られ、奈良県野山古墳群においても8期の10～20m程度の方・円墳が検出されているが棺内への武器配置が多い（A1型）。

後期（集成８～10期）・東日本

東日本におけるａ・ｂクラス（50m以上）の古墳では茨城県三昧塚古墳（8期：●80m）において主体部の調査が行われている。主体部は箱式石棺で頭蓋骨周辺からは金銅冠、垂飾付耳環が検出され、手玉と貝釧が装着した状況で出土した。冠の左側には鏡、人体の両脇に大刀2、剣1が添えられ、足元方向では鏡、櫛、刀子、鉄鏃、甲冑が置かれており（A2型）、これとは別に棺外には戟1の出土（C3型）と遺物専用の埋納施設が存在する。この施設からは刀1、刀子1、鉄鏃160、短甲1、挂甲1、衝角付冑1、鉄斧1、馬具、砥石が出土している（D2型）。千葉県姉崎山王山古墳（9期：●69m）では鏡や金冠などの装身具を除いて環頭大刀と木装大刀、胡籙2具に納められた鉄鏃が出土した（A1型）。

後期における東日本ｃクラス（49m以下）古墳では中期から引き続きA2型の副葬が散見できる。静岡県団子塚9号墳（9期：○17m）、栃木県七廻鏡塚古墳（9期：○28m）、静岡県石之形古墳（8期：○27m）、千葉県経僧塚古墳（10期：○24m）、茨城県舟塚山8号墳（9期：○8m）などでも人体周辺から3種類以上の異なった機能を有する武器を少量ずつ副葬したA2型、及びそれに類する武器配置が行われている。初期の群集墳

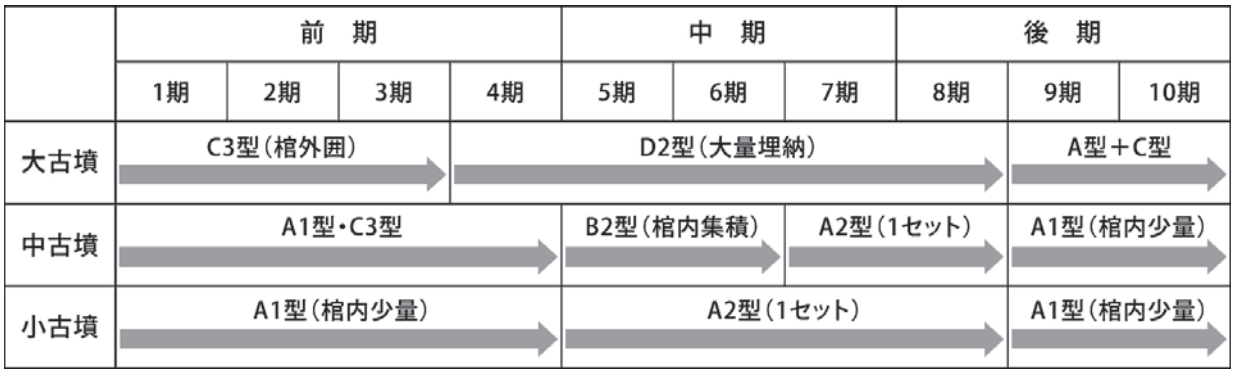


表１　代表的な武器配列の変遷模式図

である群馬県多田山古墳群では棺内から少量の武器が出土した事例が認められ（A1型）、同じく愛知県愛野向山古墳群においても明確な高い盛土を持たない10m以下の小円墳（箱式木棺）などから武器が出土する場合は棺内から刀剣や鏃などが数本程度である（A1型）。

後期（集成８～10期）・西日本

西日本でも50m以上の後期古墳で竪穴系内部主体が残存した事例は少ない。宮崎県西都原古墳202号（9期：●50m）の後円部主体は1912年の今西龍による調査記録があり、それによれば「屍体ヲ安置シ其頭ヲ西北ニ向ケテ、枕頭ニハ平瓮、玉類ヲ置キ、土ヲ寄スルコト二尺ニシテ其ノ頭部ノ左ニ直刀及嚴瓮ヲ、其ノ腰部ノ左ニ嚴瓮ヲ置キ脚部ハ土ヲ寄スルコト一尺餘ニシテ直刀、鉄鏃等ヲ置キシモノヽ如シ」とあるから棺内から玉類、須恵器、刀、鏃が出土していることがわかる（A1型か）。

西日本では50m以下でも竪穴系の内部主体を持つ古墳は少ないが、兵庫県西山・奈良山古墳群の事例では西山1号墳（10期：○10m）の第1主体部埋葬施設1（木棺直葬）の棺内から須恵器、土玉、鉄鏃2が出土しているように少量の武器を棺内に副葬した事例が認められる（A1型）。その中で西山6号墳（9～10期：●35m）の後円部埋葬施設6（木棺直葬）は棺内の東小口部で金銅冠を着装した頭蓋骨が出土し、人体左脇に刀、右脇に刀子が置かれていた。棺中央右脇には矛が、足下の西小口では鉄鏃一括が置かれ弓飾金具も出土している（A2型）。

4. 武器副葬の時代的特徴と変遷

武器の副葬状況の代表事例を見てきた。それぞれの状況は千差万別であるが、各時代、各墳丘ランクで、それぞれ特徴的な配列があることも指摘することができる。ここではそれぞれ時代性をあらわすような配列状況をまとめておく。

前期

前期における大型古墳（ａクラス）を特徴づけるのは棺（槨）を武器で取り囲む配列である。棺内には鏡や玉類など個人的な装身具があり、小口部分などに武器が見られることもあるが、武器配列の中心はC3型とした棺外での棺を取り囲むような武器配置といえる。またA・B・Cの各段階で副葬（葬送儀礼）行為を行っているという厚葬性も特徴的であろう。

このC3型を主とする配列様式は集成1期（京都府椿井大塚山古墳）まで遡ることが可能と考えられ、特に近畿地方においては前期の大型古墳（ａ・ｂクラス）のほぼ全て、更にｃクラスにおいても存在することから（奈良県鴨都波1号墳）、かなり普遍的な武器配置であったと評価す

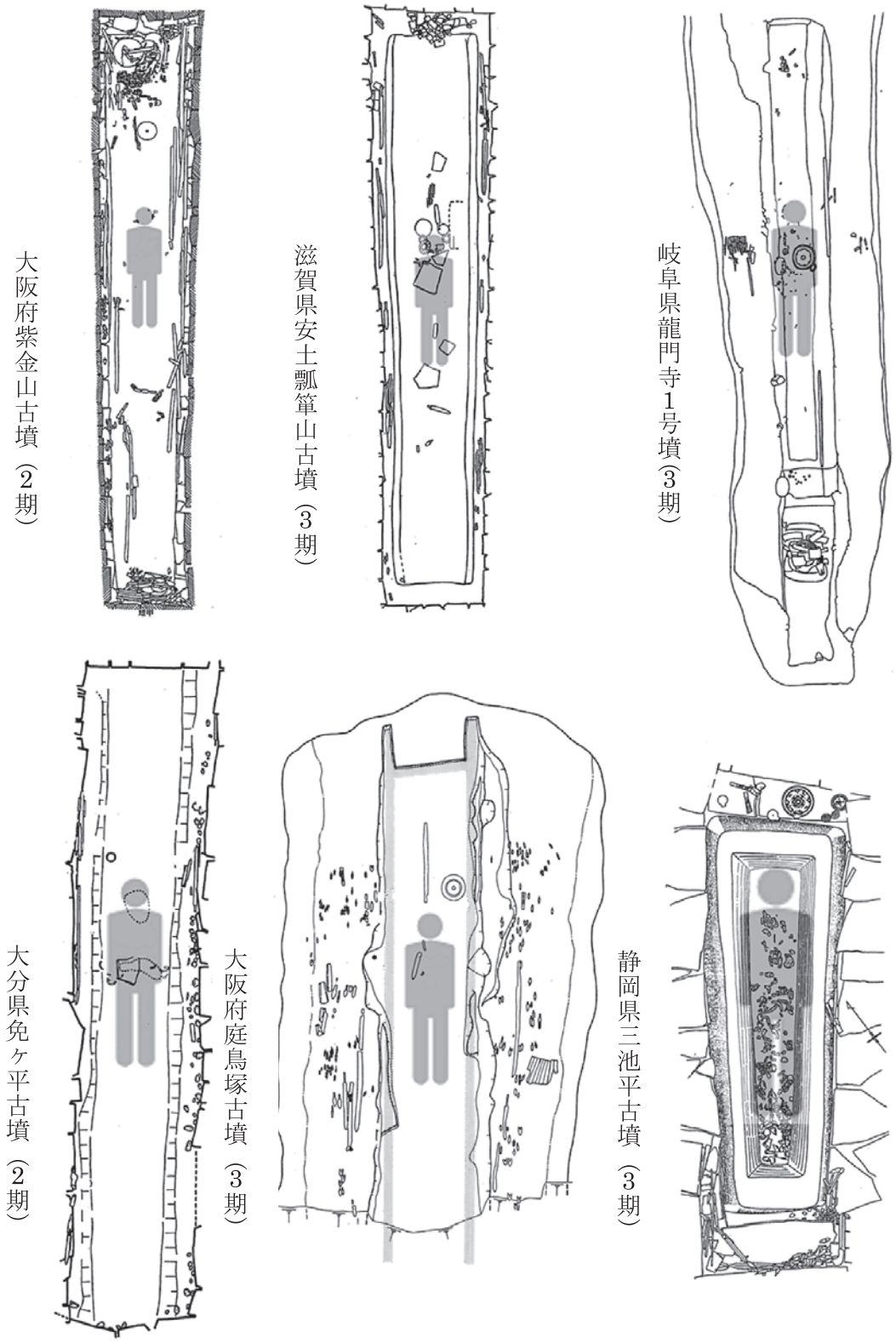
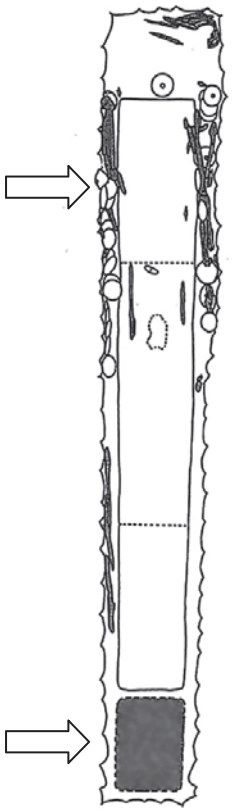
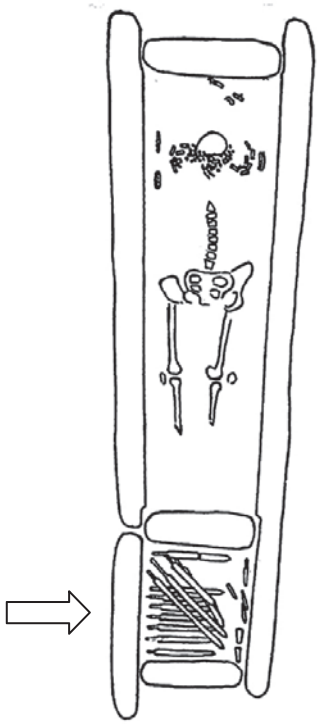


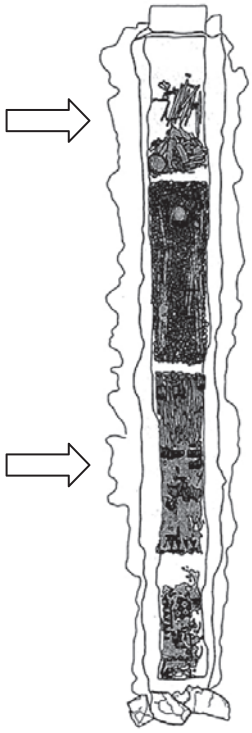
図2　C３型武器配置（スケール不同：人型アイコン 1.5m）



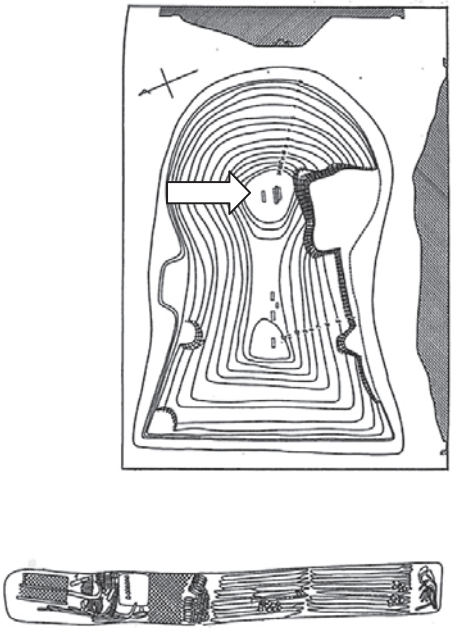
奈良県黒塚古墳（2 期）



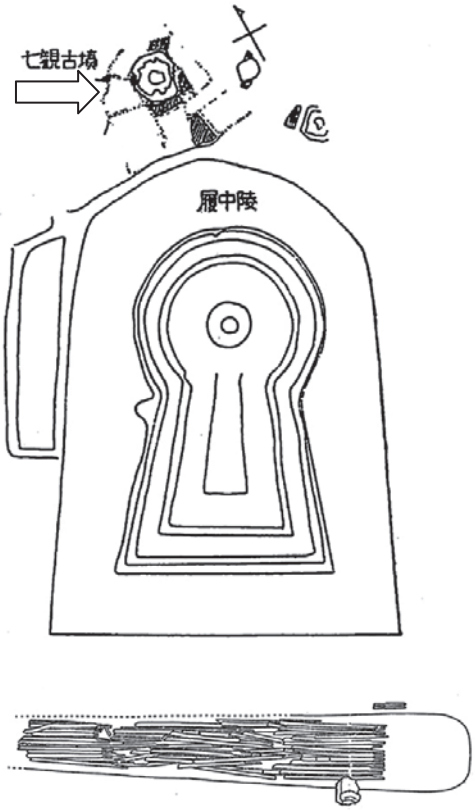
京都府作り山 1 号墳（3 期）



兵庫県茶すり山古墳(5 期)

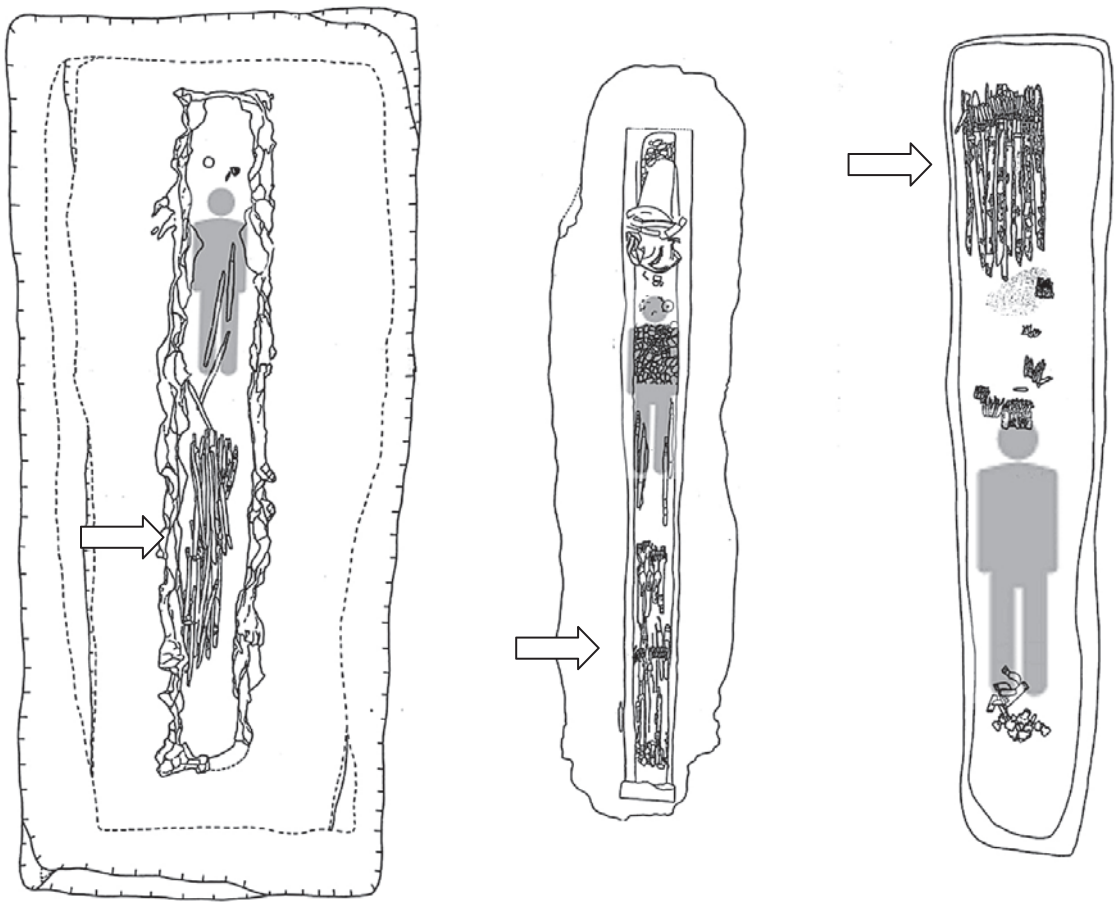


大阪府百舌鳥（堺）大塚山古墳　（5 期）



大阪府七観古墳（6 期）

図 3　武器の大量埋納化の発展模式図（スケール不同）



福井県天神山7号墳　第2主体部（6期）

岡山県月の輪古墳　中央主体（5期）

東京都野毛大塚　第3主体（5期）

図４　武器の集積（Ｂ２型　スケール不同：人型アイコン 1.5m）

ることができるだろう。

また近畿以外でも大・中型の古墳（ａ・ｂクラス）を中心として広い分布を示し、東は静岡（三平池古墳）から岐阜（龍門寺1号墳）あたりのラインまで、西は瀬戸内沿岸を中心に福岡（一貴山銚子塚古墳）・大分（免ヶ平古墳）まで明確な分布領域を示す。これらの事実からＣ3型の痕跡を残すような、棺外で武器を取り囲む配列を伴う共通的な葬送儀礼が、前期の大・中の首長たちによって実施されていたと考えて大過ない。

一方、前期における小型の古墳（ｃクラス）においては木棺や箱式石棺などの棺内に数本程度の刀剣や鉄鏃を副葬するものが多く（Ａ1型）、弥生時代からの伝統的な武器副葬が継承されている可能性が高い。弥生時代後終末期の墳墓への副葬品では一部の例外（京都府大風呂南1号墳など丹後地方）を除いて全国的に刀、鉄鏃が数本の副葬程度に過ぎず、集成1期に位置づけられる小古墳の中には古墳のあり方や地域的特徴（一墳丘での多数の主体部、伝統的な箱式石棺など）からみて、弥生時代後終末期からの連続性が明らかなものが認められるためである。

静岡以東や山陰、南九州などの大・中型（ａ・ｂクラス）の墳墓については、そういった少数の武器を棺内に副葬するという伝統的な影響と、政治的中枢（近畿地方）で多く見られる同種多量の武器を棺外に配置する、という影響との強弱によって、少数を棺外に配置したり（鳥取県馬山4

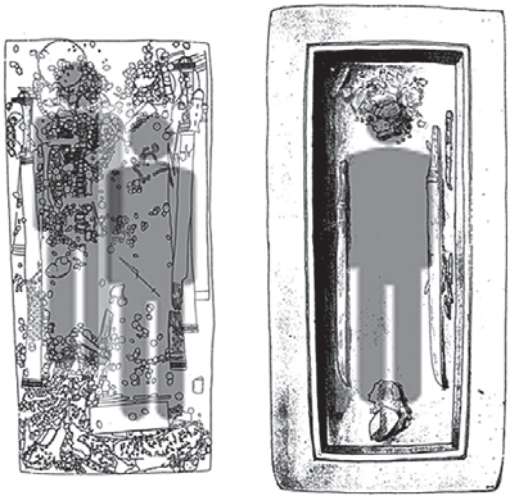


図５　藤ノ木古墳、鴨稲荷古墳
（スケール不同：人型アイコン 1.5m）

号墳）、棺内に中程度の武器を副葬する（栃木県山王寺大枡塚古墳）などといった、やや均一性を欠く配置を生じせしめていると考えられる。

中期

近畿におけるａ・ｂクラス前期古墳の武器配置の特徴は、棺外に武器を並べることで、遺骸を外部から遮断しようという試みであったと考えられるが、中期の大・中型の古墳（ａ・ｂクラス）では武器の同種多量性への偏好さが濃厚となる。武器の大量埋納施設は奈良県南西部の一角において早くに発達し（メスリ山古墳、新沢千塚500号墳、池ノ奥1 ～ 3号墳）、中期（集成5期）以降に普遍化していく。

その発展過程を摸式化すれば以下の通りである。まず古式古墳（集成2期）の奈良県黒塚古墳では石室南小口部分に鉄鏃、小礼、鉄製農工具などの副葬品を置き、京都府寺戸大塚古墳においても14振程度の刀剣が木棺内の一ヶ所に上下相重なって出土するなど、武器を集積する行為は古墳発生期から認めることができる。

その後、集成3期の京都府作り山1号墳では石棺の副室部分に農工具と鉄剣12がまとまって納められ、集成5期の兵庫県茶すり山古墳では棺内を4つに区画し、甲冑や武器類、盾などが区画毎に整然と並べられるなど、武器を集積する行為は急激に進む。先述したように奈良県南西部の一角で武器を大量に納める遺物埋納施設が出現しているのも集成3 ～ 4期である。

集成5期の大阪府百舌鳥（堺）大塚山古墳では前方後円墳内の6か所に遺物埋納専用施設が認められており、大王クラスの一古墳から出土する武器量は膨大な数にのぼる。6期以降では大阪府七観古墳のように古墳外に付属する遺物埋納施設の陪塚に大量の武器が納められるようになり、武器以外に鉄製農工具（大阪府西墓山古墳西列）、鉄鋌（奈良県大和6号墳）、滑石製模造品（大阪府カトンボ山古墳）などといった器種分化に基づく大量埋納が明瞭になる。これら副葬品を膨大に消費するような古墳祭祀は、主として近畿地方の大首長によって執行されるが、同地域では中クラスの古墳でも棺外に武器をまとめて置くような武器配置が見られるなど（大阪府唐櫃山古墳、和歌山県大谷古墳）、特に数的極大化への偏好が顕著である。

このような武器を大量に副葬するという時代的特徴は地方の大・中首長（ａ・ｂクラスの古墳を築いた地方首長）たちへも影響を与えている。例えば東京都野毛大塚古墳では刀剣や鉄鏃などを群ごとにまとめて置かれており、福井県天神山7号墳では棺内に2列に密集した刀剣類が置かれていた。また岡山県月の輪古墳の棺内では同様に刀剣や鉄鏃、工具類を密集して置いているのである。

中期の大首長（ａ・ｂクラス）たちによる武器副葬の意識は前期から中期にかけて「遺骸の遮断」から「大量に埋納する」へと変化しているが、一方、中・小型の古墳（ｂ・ｃクラス）ではやや異なる儀礼体系の下に武器が副葬されていたと評価することができる。

中・小首長たちの副葬行為は、前期の「刀剣や鏃を数本」といった弥生後終末期に類似していた行為から、中期には甲冑、刀剣、弓矢といっ

た3種類以上の用途の異なる少数の武器を人体周辺に副葬するものが全国各地に多数みられるようになる（A2型）。典型的な事例は福岡県井出ノ上古墳のように、熟年男性の足元（又は頭位）に甲冑を置き、人体の左右脇には刀剣、鉄鏃などを配置する。棺内外の区別や甲冑の有無を問わなければ奈良県塚山古墳や埼玉県東耕地3号墳などにおいても人体周辺に少数ずつの武器を副葬しており、副葬品における武器の比率は高い。

後期

甲冑、刀剣、弓矢（鏃）といった3種類以上の武器を少数ずつ配置する副葬（A2型）は後期初頭（集成8期）まで多く、東国では80mクラスの茨城県三昧塚古墳においても見ることができる。また、三昧塚では別の一領具足を納めたような小型の遺物埋納施設が付属しているが、同様の施設は大阪府土保山古墳でも存在し、中・小古墳における豊富な種類の武器の扱い方は実際の個人的装具（武装）を彷彿とさせるものがある。

また後期においては、a・bクラスの大首長間において流行した武器副葬の大量化は急速に影を潜め、武器の副葬も少数の飾大刀や挂甲などに限定されてくる。奈良県藤ノ木古墳や滋賀県鴨稲荷古墳の棺内（人体周辺）からは冠や玉類、沓などの装飾品と共に飾大刀や刀子が副葬されているが、そのような副葬品組成から判断する限り、後期古墳の棺内に副葬されている武器は、実際に生前の被葬者が装着していた個人的属性の高い遺物であったと推定できものである。

5. 古墳へ副葬された武器の価値

はじめに武器は本義的には対人殺傷のための利器である、と記した。しかし武器へ託された思考や機能はそれだけに留まるものではあるまい。モノのおける様々な価値の追及といった問題は、これまでにも主に経済学の分野で研究されてきた。例えば、カール・マルクスはモノには使用価値と交換価値があるとするが、使用価値とはモノの功利的な面であり、交換価値とはいわゆる商品としての価値側面である（マルクス 1969）。こういった古典的なモノの価値観に対し、ジャン・ボードリヤールは、モースの贈与論（モース 2009）やバタイユの消尽論（1973）を媒介として、モノには使用価値や交換価値には還元できない象徴価値や記号的な意味があると説いた（ボードリヤール 1980: 87–244、1981: 101–163）。

マルクスやボードリヤールは現代社会を解明する方法論としてモノの価値を追求したのであるが、考古資料である過去の武器、特に古墳という墳墓から出土する武器の意味を考察する際においても、ボードリヤールの説く様々なカテゴリーの検討は極めて有意義であろう。そこで、これらの研究を参照に武器を以下の4つのカテゴリーに区分し、本論で検討した古墳出土武器の価値的な背景を検討してみよう。

第1のカテゴリーである使用価値とは、容器としての土器、穂摘具としての石包丁、というモノの利器としての価値、あらゆる道具の第一義的なカテゴリーである。武器・武具に関して言えば「殺傷のための道具」や「殺傷から身を守

表2　価値のカテゴリー

第1のカテゴリー	使用価値	対人殺傷（利器）としての武器
第2のカテゴリー	交換価値	交換や配布される経済的価値としての武器
第3のカテゴリー	象徴	象徴的な贈与や祭祀行為における武器
第4のカテゴリー	記号	身分の表象を意味する武器

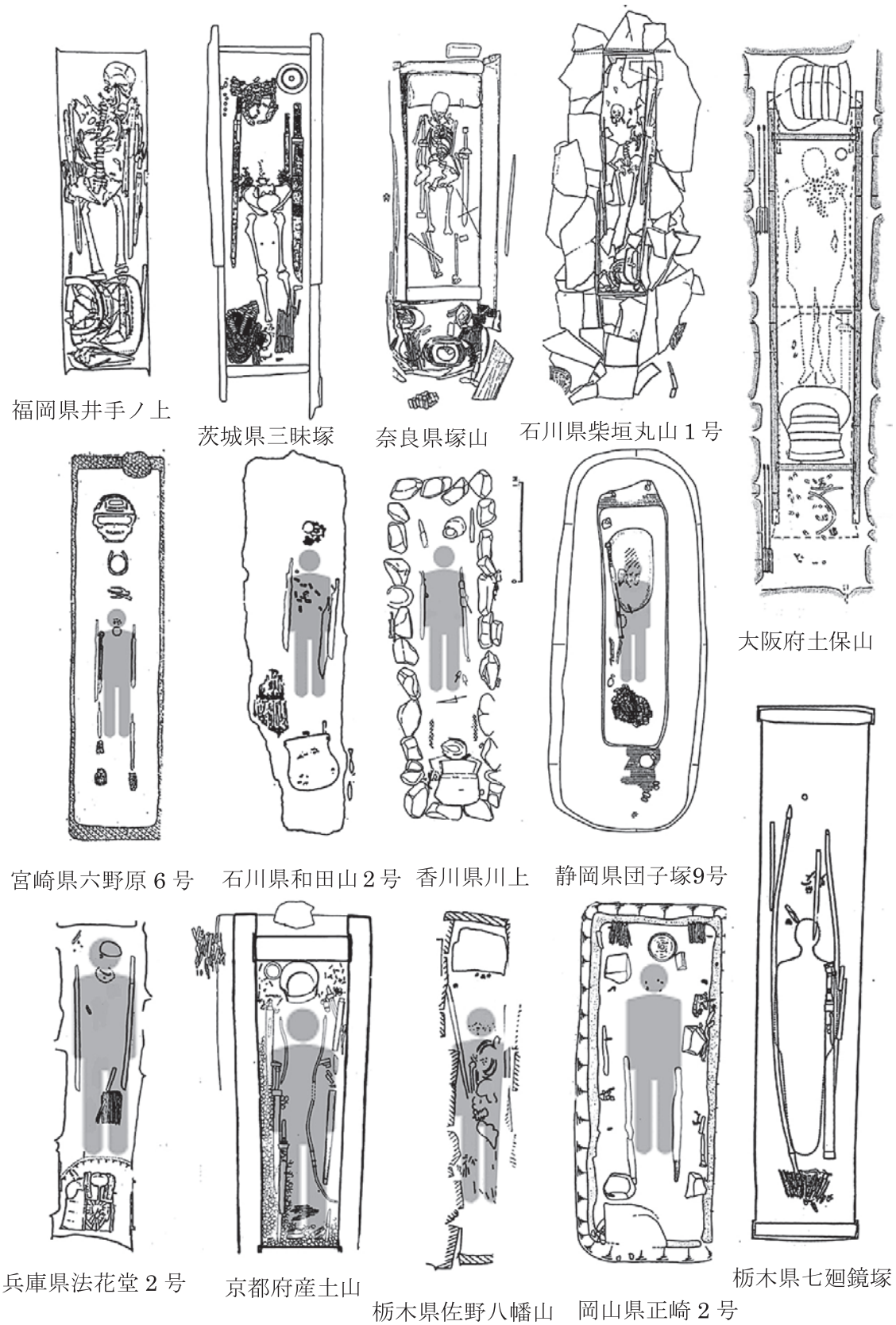


図６　武器のＡ２型副葬（スケール不同：人型アイコン 1.5m）

るための道具」という価値がこれに該当する。

第2のカテゴリーである交換価値は主に近代経済学において検討されてきたモノの側面である。しかし前近代的な社会においても「クラ」交易として知られるトロブリアンド諸島の首飾りや腕輪などのように交換価値として重要視された道具が存在しており（マリノフスキー 1980）、地理的な長距離移動が証明される考古資料についても贈与交換に伴う交換価値が付与された可能性は高い。

その他、先述したボードリヤールの研究で知られるように使用価値や交換価値には還元できない象徴的な価値（第3カテゴリー）や記号的な価値（第4カテゴリー）を有するモノも存在する。刃部が鈍化した利器や意図的に折り曲げられた刀剣などについては第三の道具として何らかの象徴的・記号的な意味が付与されていたと推定できるだろう。

象徴（Symbol）と記号（Sign）とは互いに関連する内容もあるが、全く異なる概念でもある。象徴とはある種の観念や概念をより具体的な事物や形によって表現したものを指し、記号とは何かを指し示すことを通じて意味を発生させるものを指す、すなわち象徴とは多義的な意味を内包するイメージを具象化したもの、記号とは言語やマークなど、ある種の規範によって意味が付与されたものである。武器の場合でいえば攻撃力、防御力というような観念を特定の武器によって表現した場合は本質的に象徴的価値であり、武器を所持することで身分階級など規範的コードを表象した場合は本質的には記号的価値となる。

さて、これまで武器の配列状況を区分した結果、古墳へ副葬された武器の扱いは、時代性や被葬者の階層によってかなり異なっていることが明らかにできた。そのことは、様々な地域やランクにおける古墳の葬送儀礼体系の中において、武器がどのように認識されていたかの思考的背景を表現していると考えられる。

前期における大型古墳を特徴づける武器副葬は、主に棺外に武器を取り囲むように配列するものである。そこには武器を用いて古墳被葬者であるかつての首長を密封し、僻邪などの遮断的な効果が期待されていたと想定できる。その思考体系の中で重視された価値は武器の持つ武威や武徳、すなわち第3カテゴリ―の象徴性である。

広瀬和雄は前方後円墳の機能として、首長の遺骸を保護・密封・僻邪することによって聖性を保持・顕彰し、共同体を守護するイデオロギー的な装置を想定するが（広瀬 2010）、刀剣など同種多量な武器によって遺骸を外部から遮断しようという思考回路や儀礼体系は、前期における各地の大首長クラスを通じた共通認識として、広範な地域で受け入れられていたと考えられる[1)]。

中期の大・中型の古墳においては大量の武器を埋納することが時代の特徴性として指摘でき、近畿の中・小型古墳や、地方の大・中古墳へもその影響が見られた。豊島直博は鉄器埋納遺構について、儀礼用に特別に生産された武器である可能性を指摘しているが（豊島 2000）、中期の大量埋納における副葬品の意義としては、量的な誇示や消費などを通じての象徴性、といった価値が古墳祭祀の中で見出されていたといえるだろう[2)]。

横穴式石室の導入、須恵器の副葬などといった葬送観念の大変革[3)] を経た後期における大王クラスの墳墓（奈良県藤ノ木古墳、滋賀県鴨稲荷古墳）では、実際に身に着けていたと考えられる金銅製冠や沓、豪華な玉類などと共に飾大刀が出土している。この段階における武器は飾大刀で代表されるように装飾性が強くなり、むしろ実用品としての武器よりも被葬者の身分を表象する記号的な意味が重視されていたと考えられる。

上記のような武器の価値観の変遷、「象徴性・儀礼性を帯びた武器副葬」から「記号としての個人的属性を帯びた武器副葬」といった遷り変わりは主として近畿地方を中心とする大型古墳

（大王、大首長クラス）のものである。一方、多くの小古墳（50m以下、特に20m以下の古墳や低墳丘墓）においては、それらとはやや異なる価値体系が想定できる。

前期の小古墳にみられる副葬品の多くは刀剣や鉄鏃が数本程度に過ぎず、弥生後終末期に全国規模で見られた風習に類似している。特定少数の武器については象徴的な意味合いも考えることができるが、玉類などと共に棺内の人体付近から出土することが多く、むしろ実際に生前に使用していたものを副葬した蓋然性が高いであろう。

中期においても、大・中型の古墳被葬者が武器の大量埋納、特に同種多量の埋納に価値を見出しているのに対し、中･小型の古墳では、甲冑、刀剣、弓矢など多種類の武器・武具をそれぞれ少数ずつ人体周辺に副葬する事例が多い（A2型）。被葬者周辺に並べられたこれらの武器は、身を守るための防具（甲冑）、接近戦用武器（刀剣）、遠距離戦用武器（弓矢）など利用価値としてはそれぞれが異なる用途を持つものであり、それらが揃うことによって戦闘機能を満たすことができるもの、かつ実際に装備した場合の1セット程度の武器量であったと評価することができる。

通常、日本列島における弥生～古墳時代の墳墓や祭祀遺跡などから出土する遺物の特徴としては、弥生時代の儀仗化した青銅武器（銅矛・銅剣）は同種大量に埋納され（石橋 2011）、古墳時代の一般的な祭祀遺跡では手づくね土器、ミニチュア模造品などが同種大量に埋納される（北武蔵古代文化研究所 1993）。また本論でみたように古墳時代前期の大型墳墓においては鏡、剣、腕輪など特定威信財のみが選別されて集中的に埋納されているなど、象徴的な価値を有する祭祀遺物の用い方としては、特定の器種を集中的に選別し、その上で大量に集積するような行為が行われるのが一般的である。古墳時代前期～中期において大・中型の古墳で発達した武器の大量埋納化への変遷も、儀礼的用具の象徴的価値へと傾斜過程として位置付けることができるであろう。

それら同種大量に埋納された儀礼的な道具と比較すれば、中期の中･小型古墳では甲冑、刀剣、弓矢（鏃）といった用途の異なる武装体系を満たし、それぞれ個人が使用可能な少量ずつを被葬者周辺に並べる配列様式を抽出することができた（A2型）。その葬送儀礼の際に武器に付与された価値体系としては第1、もしくは第4のカテゴリー、すなわち利器としての総合的な武装体系や、生前に武備を専らとした身分の記号性としての武装であった可能性が高いであろう。次章ではこの問題について副葬品の実用道具としての可能性について検討してみよう。

6. 副葬品における実用性と軍事組織復元の可能性

古墳副葬武器の具体的出土状況とその意味する価値背景を考察してきた。それでは最初の設問に戻って「古墳時代の武器がどれほど過去の武装や保有、実際の使用を具現するのか」検討してみよう。古墳の副葬品として出土する武器は、出土状況から判断する限り葬送儀礼のための用具とみて大過ない。その意味で古墳の副葬武器からアプリオリに実際の武装や軍事組織を検討することは方法論的に問題がある。

しかしそうであるからといって、副葬遺物から葬送儀礼以外の社会現象を復元することは不可能なのであろうか？　ここでは副葬遺物の中に実際に使用した痕跡の残る物的証拠を概観し、遺物の種類や副葬品配置などからどのようなことが読み取れるのか考えてみたい。

古墳から出土する武器については、仮器化した奈良県メスリ山古墳の鉄弓・鉄矢や、意図的に利用価値を喪失させた折れ曲げた鉄器（門田 2006）など、非実用性を前提としたものも確かに存在している。しかし古墳出土武器の大部分は刃部の鋭利さや耐久性などから判断すれば実

際に使用可能な形態を示しており、弥生時代の青銅武器が大型化・儀仗化といった非実用性を強調していったのとは対照的である。多様な形態を示す古墳時代の鉄鏃についても時代が下るにしたがって全体的には先尖化、細身化、長頸化を志向し後世の実戦用鉄鏃（「征矢」）に類似しており（松木 2001）、このことは古墳へ副葬される鉄製農工具が小型化･ミニチュア化する（寺沢 1979）のと比較しても武器における実用的な機能的進化は目覚ましいものがある。

ただし実際に使用可能な能力を有する可能態であるとしても、現実的に実用品であったか否かは別問題であり、明確に実用品と非実用品との二項目に分類することも無意味であろう。この点について香川県大墓山古墳（9期：●46m）出土の挂甲は皮紐通しの孔以外にクサビ形の穴が認められ、穴の周囲は裏側に捲かれている。この状況から高速で飛来した鉄鏃による矢傷が想定されており、実際に使用（佩用）していた挂甲であった可能性が高い。また長野県や徳島県下においては副葬されている馬具（轡）の欠損部分を修繕した痕跡が報告されており（松尾 1996; 栗林 1999）、現実に使用、欠損、修繕のサイクルを経た道具が副葬されていることが証明されている。その他では、利器によって殺傷を受けた殺傷人骨が古墳から出土した事例もあり（小片 1981）、実際に古墳被葬者をめぐって武器などを用いた暴力的な活動が生起していたことも明らかである。古墳の葬送儀礼のために副葬された道具には、このように実際に使用していたものも含んでいることは注意すべきであろう。

副葬品配列、すなわち遺物の出土状況からはどうであろうか。本論では武器の副葬品配列の分類を試みたが、副葬の各段階に対応して人体周辺（A型）、人体外の棺内（B型）、棺外（C・D型）と大きく区別することができた。これらの区別は葬送儀礼の各段階における副葬品へ付与された思考回路（価値体系）の相違を反映していると考えられる。

例えば滋賀県安土瓢箪山古墳の人体周辺の武器は短剣2、鉄鏃2程度であるのに対して刀剣17、鏃50、短甲1などの大量の武器は棺外を囲むように配置しており、武器以外においても奈良県黒塚古墳では棺外に33面の大量の三角縁神獣鏡を並べ置くのに対し、棺内の人体周辺には画文帯神獣鏡1のみを配置するなど、意図的に人体周辺と棺外とでは副葬品の区別が認められる。また人体周辺で出土する遺物のうち首輪、足輪等の玉類や腕輪類などについては大分県免ヶ平古墳など人骨と共伴する事例から実際に被葬者が装着していた遺物と考えられ、人体周辺の玉類や腕輪類については通常の副葬品（象徴的な儀礼用の遺物）というよりは実際に被葬者が佩用していた服飾品（実用品）である蓋然性が極めて高い。

すなわち古墳の葬送儀礼において各段階の副葬が行われる場合には、概して人体周辺に配置した遺物（A型）は特別なもの、少数のものであるのに対し､棺内の一隅（B型）や棺外（C型）に配置する場合には独立して特定器種を多数配置する傾向が認められるのである。価値的な背景を推定すれば人体周辺の遺物は被葬者個人に関連するものであった可能性が高く、逆に被葬者から離れて棺内の隅や棺外に大量埋納された遺物については象徴的な意味合いが付与された可能性が高いと評価できるだろう。

繰り返しになるが古墳の副葬品はアプリオリに実用品と判断することは出来ず、第一義的には葬送儀礼のための用具として出発すべき性質のものである。しかし一方で副葬品の中には実際に使用したものや被葬者が佩用していたものも含んでいるために、副葬品から実際の武器や武装を表している可能性も否定することはできない。

ただし、副葬品の配列状況やその価値的背景から判断すれば前・中期における大古墳の副葬品武器、特に大量に副葬された武器などについては､より象徴的な意味合いが強いと考えられる。

また後期においては武器の記号的な役割が強いと考えられ、被葬者の政治的な身分的表象としての武器が想定される。

それらと比較をすれば中・小型の古墳から出土する武器においては、配置状況や価値的背景の検討から、実際の武装体系の状況を反映した可能性が考えられるために、古墳の武器や武装から実際の戦闘や軍事組織を検討する余地が残るといえるであろう、本論ではこの可能性の積極的な評価をもって結としたい。

まとめ

古墳時代の戦闘や軍事組織を復元する基礎的研究として、古墳出土の武器から実際に使用していた可能性などがあるかどうかの分析を試みた。最初に武器の副葬品配置の特徴や変遷などを検討した結果、武器の副葬方法には時代的、地域的、階層的な特徴がそれぞれに認められることを明らかにした。したがってアプリオリに副葬武器などから古墳時代の実際の武装や軍事組織を検討することは慎まなければならないという結論を得た。

一方では、古墳に副葬された遺物には実際に使用されていた可能性の高いものも確実に存在し、副葬武器の価値的背景などと併せて考察すると、人体周辺に防具（甲冑）、接近戦用武器（刀剣）、遠距離武器（弓矢）などの各用途に基づく武装体系の武器・武具を配置している中・小首長たちの背景には実際に使用していた可能性、又は生前の身分を表していたような記号的な価値観が推定でき、古墳時代中期～後期の中・小首長を中心とする軍事組織の復元については検討の可能性が指摘できた。今後はこの可能性を広げ、より大局的な研究を目指したい。

註

1）前・中期の大規模古墳においては鏡・武器・農工具など特定の威信財を中心とした大量の埋納儀礼が行われ、個人の死を特徴付けるものが少ない。そのために前・中期古墳に底流する儀礼の本質とは決して個々人の死生や魂の救済を主たる問題としたものではなく、社会的地位、威信、富といった死者にまつわる社会秩序の維持や再生産に重点が置かれていたものと考えられる。こういった社会的な葬送儀礼の実例としてはギアツによるバリ島の事例（ギアツ 1990）やインドネシアのトラジャ族の事例（山下・内堀 1986: 213–277）などの文化人類学において報告された事例が参考になる。

2）儀礼の概念として人類学者の青木保は一方の極に超越的な、または象徴的な事象と大きくかかわるものとしての儀礼を置き、他方にはパフォーマンスを含む日常的な出来事と重なるレベルとして儀式（ceremonious）を対置し、両者の全体をさして儀礼（ritual）という用語をあてた。そして儀礼の意義としては「人間は動物と同じく、社会に生きるかぎりコミュニケーションや集団の結束や攻撃性の回避などの面から「儀礼化」し、文化形式としてそれを発達させ、儀礼行動を行わざるを得ないが、それはまたこの日常の現実の不安定な両義性の中で、何か確たる真実を求めて、絶えず儀礼をしなくてはならないことも意味する」と説明している（青木 2006: 28–29）。貴重な威信財としての武器を埋納し二度と使用できないようにするような儀礼行為は一種のポトラッチ的な富の破壊や浪費であり、別の見方からすれば人知を超越した存在や霊的なるものへの供犠や贈与の一種ともいえる。

3）後期古墳における儀礼行為の考古学的研究としては小林行雄のヨモツヘグイ（黄泉戸喫）儀礼（小林 1976b）、白石太一郎のコトドワタシ（事戸渡）儀礼（白石 1975）などが知られているが、これらの復元された儀礼からは、古墳時代後期には、肉体が滅んでも魂は生き続けるというような霊肉二元論に基づく観念的な他界観の類推も可能であり、前・中期の葬送儀礼とは異なって死後の他界観や魂といったような観念的な思考体系を具現化する儀礼的な行為を反復することによって死に対する意味付けが行われていたと推察できる。なお、古墳時代における葬送儀礼を具体的に復元したものとしては岩松保の研究がある（岩松 2006）。

参考文献

青木　保
2006　『儀礼の象徴性』東京：岩波書店。

バタイユ、ジョルジュ
1973　『呪われた部分』生田耕作訳、東京：二見書房。
ボードリヤール、ジャン
1980　『物の体系』宇波彰訳、東京：法政大学出版局。
1981　『生産の鏡』宇波彰・今村仁司訳、東京：法政大学出版局。
藤田和尊
1988　「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集』8、425–527頁、東京：吉川弘文館。
1995　「古墳時代中期における軍事組織の動態—松木武彦氏の批判文に応えつつ—」『考古学研究』41(4): 78–94。
2006　『古墳時代の王権と軍事』東京：学生社。
ギアツ、クリフォード
1990　『ヌガラ－19世紀バリの劇場国家』小泉潤二訳、東京：みすず書房。
原田大六
1962　「南鮮政策と後期古墳」『考古学研究』34: 8–19。
広瀬和雄
1991　「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成　中国・四国編』24–26頁、東京：山川出版社。
2010　「前方後円墳祭祀の理論—墳頂部の内方外円区画をめぐって」『カミ観念と古代国家』61–101頁、東京：角川学芸出版（初出は、2008『国立歴史民俗博物館研究報告』145集）。
今尾文昭
1984　「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』6、111–166頁、東京：吉川弘文館。
石橋茂登
2011　「銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察」『千葉大学人文社会科学研究』22: 84–100。
岩松　保
2006　「古墳時代後期における葬送儀礼の実態」『京都府埋蔵文化財情報』99: 5–18。
岸本一宏
2010　「第1主体部副葬品配置の検討」『茶すり山古墳　総括編』（兵庫県教育委員会　兵庫県文化財調査報告　第383集）519–530頁。
北武蔵古代文化研究所編
1993　『古墳時代の祭祀』全3巻、東日本埋蔵文化財研究会（自費出版）。
小林行雄
1959　『古墳の話』東京：岩波書店。
1976a　「竪穴式石室構造考」『古墳文化論考』157–178頁、東京：平凡社（初出は、1941『紀元二千六百年記念史学論文集』東京：東京帝国大学文学部史学科編）。
1976b　「黄泉戸喫」『古墳文化論考』263–282頁、東京：平凡社（初出は、1949『考古集刊』2、東京考古学編、東京：示人社）。
近藤義郎・今井　堯
1971　「群集墳の盛行」『古代の日本』4、193–211頁、東京：角川書店。
栗林誠治
1999　「馬具の修理痕」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　真朱』3: 41–53。
マリノフスキー、ブロニスワフ
1980　「西太平洋の遠洋航海者」寺田和夫・増田義郎訳『世界の名著』59、55–342頁、東京：中央公論社。
マルクス、カール
1969　『資本論』1、向坂逸郎訳、東京：岩波書店。
松木武彦
1992　「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価」『考古学研究』39(4): 58–84。
1994　「古墳時代の武器・武具および軍事組織研究の動向」『考古学研究』41(1): 94–104。
1995　「考古資料による軍事組織研究の現状と展望」考古学研究会編『展望考古学』148–153頁。
2001　「弓と矢の系譜」『季刊考古学』76: 30–38。
2007　『日本列島の戦争と初期国家形成』東京：東京大学出版会。
松尾昌彦
1996　「補修痕のある馬具」『伊那』6: 25–31。
光本　順
2001　「古墳の副葬品配置における物と身体の分類及びその論理」『考古学研究』48(1): 96–116。
水野敏典
1993　「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬」『古代』96: 74–104。

門田誠一
2006　「古墳出土の曲げられた鉄器について」『佛教大学文学部論集』90: 51–62。
モース、マルセル
2009　『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳、東京：筑摩書房。
小片丘彦
1981　「日本古人骨の疾患と損傷」人類学講座編集委員会編『人類学講座』5、189–228頁、東京：雄山閣。
小野山節
1959　「馬具と乗馬の風習　半島経営の盛衰」『世界考古学体系』3、88–104頁、東京：平凡社。
白石太一郎
1975　「ことどわたし考―横穴式石室の埋葬儀礼をめぐって」『橿原考古学研究所論集』347–371頁、東京：吉川弘文館。
鈴木一有
1996　「前期古墳の武器祭祀」『雪野山古墳の研究　考察編』（八日市市教育委員会発掘調査報告書）145–174頁。
滝沢　誠
1994　「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事編成」『日本と世界の考古学』（岩崎卓也先生退官記念論集）198–215頁、東京：雄山閣。
田中晋作
1993　「武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について」『古代文化』45(8): 13–22、(10): 14–23。
1995　「古墳時代中期における軍事組織について」『考古学研究』41(4): 96–103。
2003　「古墳に副葬された武器の組成変化について」『日本考古学』15: 11–33。
田中晋作ほか編
2010　『倭王の軍団』東京：新泉社。
寺沢知子
1979　「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』4、503–523頁、東京：吉川弘文館。
豊島直博
1999　「古墳時代における軍事組織の形成―由良川中流域を例に」大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学』503–523頁、豊中：大阪大学考古学研究室。
2000　「鉄器埋葬施設の性格」『考古学研究』46(4): 76–92。
2010　『鉄製武器の流通と初期国家形成』東京：塙書房。
都出比呂志
2000　「日本古代の国家形成論序説」『展望日本歴史』4、16–43頁、東京：東京堂出版（初出は1991『日本史研究』343、日本史研究会編）。
宇垣匡雅
1997　「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44(1): 72–92。
山下晋司・内堀基光
1986　『死の人類学』東京：弘文堂。
用田政晴
1980　「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』27(3): 37–54。

報告書（紙面の都合上、教育委員会や埋蔵文化財センター等の省略可能な箇所については省略する）

全国
埋蔵文化財研究会1993『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』
福島県
会津若松市史1964『会津若松史　別巻1』
郡山市1999『大安場古墳群』
茨城県
茨城県1960『三昧塚古墳』
石岡市1972『舟塚山古墳周濠調査報告書』
西宮一男1969『常陸狐塚』
栃木県
大平町1974『七廻り鏡塚古墳』
小山市1972『桑57号墳発掘調査報告書』
藤岡町1977『山王寺大桝塚古墳』
前沢輝政1983「佐野市八幡山古墳調査概報」『古代』16
三木文雄1986『那須駒形大塚』
群馬県
群馬県1981『群馬県史　資料編3　原始古代3』
群馬県埋文事業団2008『成塚向山古墳群』
後藤守一1932『上野国佐波郡赤堀村茶臼山古墳』
埼玉県
東松山市2010「鉄製短甲を探る―東耕地3号墳の出土品から―」『広報ひがしまつやま』
千葉県
市原市1980『上総山王山古墳発掘調査報告』
市原市文化財センター 1989『市原市文化財センター年報　昭和62年度』
柏市2001『花野井大塚古墳ほか』

杉山晋作ほか1989「千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査」『古墳時代研究』3
千葉県2003『千葉県の歴史　資料編　考古2』
千葉県1974『市原市菊間遺跡』
市川博物館1976『法皇塚古墳』
早稲田大学2010『武射経僧塚古墳　石棺編報告』
東京都
世田谷区1999『野毛大塚古墳』
神奈川県
三田史学会1953『日吉加瀬古墳』
緑区1986『緑区史　資料編第二巻』
長野県
飯田市1992『八幡原遺跡』
長野県1982-1983『考古資料編　主要遺跡』
松本市1978『弘法山古墳』
岐阜県
岐阜市1962『岐阜市長良龍門寺古墳』
愛知県
愛知県2007『愛知県史　資料編3　考古編2』
吉良町1957『吉良町資料』1
静岡県
庵原村1961『三池平古墳』
磐田市1982『新富院山墳墓群』
磐田市1989『安久路2・3号墳発掘調査写真集』
静岡県1990『静岡県史　資料編2　考古2』
浜北市1966『遠江赤門上古墳』
浜松市博物館1998『千人塚古墳ほか』
浜松市1998『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』
袋井市2004『愛野向山Ⅱ遺跡』
袋井市1999『石ノ形古墳』
袋井市1994『団子塚九号墳』
袋井市1999『石ノ形古墳』
御厨村郷土教育研究会1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』
三重県
松坂市1981『八重田古墳群発掘調査報告書』
三重県2005『三重県史　資料編　考古1』
三重県埋文センター 2005『天花寺丘丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』
森浩一ほか1973「三重県わき塚古墳の調査」古代学研究、66
富山県
小矢部市1992『谷内21号墳』
石川県
羽咋市　1973『羽咋市史　原始・古代編』
福井県
福井県郷土誌懇談会1960『足羽山の古墳』
福井市1990『福井市史　資料編1　考古』
滋賀県
大阪市立大学1953「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳調査報告」『大阪市立大学文学部歴史学研究室紀要』
京都大学1923『近江国高島郡水尾村の古墳』
滋賀県1938『滋賀県史蹟調査報告』7
滋賀県1961『滋賀県史跡調査報告』12
滋賀県1981『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
滋賀県2010『宇佐山古墳群発掘調査現地説明会資料』
京都府
岩滝町2000『岩滝町文化財調査報告書』15
梅原末治1920『久津川古墳研究』
大阪大学1992『長法寺南原古墳の研究』
京都府1923『京都府史蹟勝地調査会報告』4
京都府1933『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』14
京都府1936『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』17
京都府1939『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』20
京都府文化財センター 1989『京都府遺跡調査概報』36
京都府埋文センター 1991『京都府遺跡調査報告』15
京都府文化調査センター 1997『瓦谷古墳群』
同志社大学1990『園部垣内古墳』
長岡京市1990『史跡恵解山古墳』
山城町1953『椿井大塚山古墳発掘調査報告書』
大阪府
大阪市立美術館1960『富木車塚古墳』
大阪大学1964『河内における古墳の調査』
大阪大学1976『河内野中古墳の研究』
大阪府1932『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』3
大阪府1953『河内黒姫山古墳の研究』
大阪府1982『唐櫃山古墳発掘調査概要』
大阪府1999『土師里遺跡』
大阪文化財センター 1980『亀井・城山』
交野市2000『交野東車塚古墳』
岸和田市1995『久米田古墳群発掘調査概要』
京都大学1993『紫金山古墳と石山古墳』
古代学研究会1953『カトンボ山古墳の研究』
豊中市1987『摂津豊中大塚古墳』
豊中市1990『御獅子塚古墳』
日本考古学協会1954『和泉黄金塚古墳』
羽曳野市2010『庭鳥塚古墳発掘調査報告』

樋口隆康ほか1961「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』27
藤井寺市1997『西墓山古墳』
由良大和古代文化研究協会1991『盾塚鞍塚珠金塚古墳』
末永雅夫1974『古墳の航空大観』
奈良県
橿原考古学研究所1977『メスリ山古墳』
橿原考古学研究所1981『奈良県遺跡調査概報』
橿原考古学研究所1981『新沢千塚古墳群』
橿原考古学研究所1989『斑鳩藤ノ木古墳概報』
橿原考古学研究所1992『野山遺跡群Ⅲ』
橿原考古学研究所1999『黒塚古墳調査概報』
橿原考古学研究所2003『後出古墳群』
御所市2001『鴨都波1号墳』
奈良県1957『奈良県埋蔵文化財調査報告書』1
奈良県1973『磐余・池ノ内古墳群』
和歌山県
和歌山県1983『和歌山県史　考古資料』
樋口隆康ほか1985『大谷古墳』
兵庫県
揖保川町1985『養久山墳墓群』
加古川市1985『カンス塚古墳発掘調査概報』
香寺町1986『法花堂2号墳』
三田市1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰ
兵庫県1935『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』11
兵庫県1992『兵庫県史　考古資料編』
兵庫県2010『史跡茶すり山古墳』
兵庫県考古博物館2010「雲部車塚古墳の研究」『研究紀要』3
八鹿市2002「沖田11号墳・短甲の発見」『八鹿発掘調査情報』2
香川県
大川町1992『大井七つ塚古墳発掘調査報告書』
善通寺市1992『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』
長尾町1991『川上・丸井古墳発掘調査報告』
日本考古学協会1983『香川の前期古墳』
愛媛県
山本雅夫・長井数秋1984「伊豫市猪の窪古墳発掘調査報告書」『愛媛考古学』7
岡山県
岡山県1986『岡山県史　18巻　考古資料』
岡山大学2007『勝負砂古墳第7次発掘調査　現地説明会資料』
月の輪古墳刊行会1960『月の輪古墳』
山陽町1975『用木古墳群』
山陽町2004『正崎2号墳』
日本古文化研究所1938『近畿地方古墳墓の調査』3
広島県
広島県1979『広島県史　考古編』
広島県1983『亀山遺跡－第2次発掘調査概報－』
広島市歴史科学事業団1991『広島市佐伯区五日市町所在城ノ下A地点遺跡発掘調査報告書』
鳥取県
佐々木古文化研究所1962『馬山古墳群』
島根県
鹿島町1985『奥才古墳群』
島根県2002『田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・角谷遺跡』
山口県
山口県2000『山口県史　資料編　考古1』
山口県埋文センター 1988『国森古墳』
福岡県
津屋崎町1991『宮司井出ノ上古墳』
福岡県1952『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』13
福岡県1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2
大分県
宇佐風土記丘資料館1986「免ヶ平古墳発掘報告書」『研究紀要』3
宇土市1978『向野田古墳』
宮崎県
えびの市2001『島内地下式横穴墓群』
新富町1986『川床遺跡』
宮崎県1915『西都原古墳群調査報告』
宮崎県1944『六野原古墳調査報告』
宮崎県1993『宮崎県史　資料編　考古2』
鹿児島県
文化庁1974『成川遺跡』

図出典

図1　新規作成

図2～6　各報文より、全て一部改変

The Value of Weapons Estimated from Placement of Grave Goods:

The Possibility of Recreating Military Organization

FUJIWARA Satoshi

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese History

The purpose of this article is to restore, conceptually, the military organization of the *kofun* period. Weapons and armor have been excavated from the ancient tombs called *kofun*. However, the military organization cannot be restored simply by studying these weapons directly. In this article, I consider first the placement of the weapons in the tombs and the condition of their preservation, and then I use these to analyze aspects of value that these weapons had in the *kofun* period. I consider what kind of armed organizations might actually have used the weapons and armor excavated from the tombs. In large and medium-size burial mounds, primarily in the Kinki region, I have determined that there was a progression, from the early to the late *kofun* period, from burials of weapons with corpses to burials in which large numbers of similar weapons were included to burials of decorative weapons. By contrast, in small- to medium-sized tombs, there are many cases in the early *kofun* period of a few weapons being placed close to the body of the deceased; in the middle *kofun* period protective gear (helmets and armor), swords for close combat, and bows and arrows for fighting at some distance are included. From the characteristics and array of weapons, I have inferred values and symbolic meanings. On the other hand, the small graves and middle-sized burial mounds contain arms that were used by, and prized by, small and great chieftains. Such sets of arms might make it possible to reconstruct an image of ancient military organization.

Key words: weapons, armor, placement of grave goods, value of arms, *kofun* period